「正宗」三瓶

び來る有り。出す所のもの悉く異羹珍膾ならざるは無し。蓋し原氏の厨夫に命じて、調理せしめたるカシミヤ料理なり。中佐其の携へ來りし「正宗」三瓶を出して曰く。既に肴あり、焉んぞ酒なかるべけんや。粗酒素より以て君が大旅行の成功を祝するに足らずと雖も、予が微意の存する所を酌むで、積日の勞を慰するを得ば予の本懷何ものか之れに加えんやと。予感喜措く能はず、唯憾むらくは性來酒を解せざるを。然れども骨肉尚ほ及ばざる中佐の好意に對し、爭でか辭するに忍びん。況んや天涯萬里の外に在りて、我國製の酒を齎せるをや。即ち一策を案じて曰く、『君が厚情謝するに辭なきも、今日之を傾け盡すは、聊か遺憾なき能はず。幸に天長の佳節は數日の後に在り。惟ふにペシャワールに向ふの途上に於て之れを迎ふるならん。萬里の異郷に在りて、同胞三人、故國の銘酒を得て聖壽の萬歲を祝す、亦樂しからずや。願くば正宗の一半を携行せん。且つや予に我國製の罐詰二三の貯へ有り、實に此の盛事に供用せんことを期せしものとす。諸君以て如何と爲す』と。皆曰く善哉々々。中佐乾杯予に勸む、予已むを得ず酒量なきを明かす。中佐予を諦視して曰く看板に僞あり君の容貌を以てすれば、數升を傾くるも

看板に僞あり